



2月になりました。1年の内で最も寒さが厳しい季節と言われますが、俳句の季語で表すと立春、初春、早春、梅、など春の訪れを感じられるような言葉もあります。また、和暦では「如月（きさらぎ）」であり、如月の語源には、春めいて陽気が盛んになる時季を意味する「気更来」もあるようです。 ※ 諸説あり

さて、この時期辺りから、どの学年も1年間のまとめに入ります。学習面、生活面等において、一人一人の子供の成長を確かめながら、進級、進学に向けての希望を大きく膨らませることができるよう指導していきます。後半には、今年度最後の授業参観と懇談会を実施します。子供たちの成長した姿を御覧いただければと思います。

2月のテーマは「つなぐ」



一昨日、2月の学校生活に向けての全校集会を行いました。その校長講話として子供たちに伝えたことが「つなぐ」ということです。

「つなぐ」とは、“心”と“学び”です。

『心をつなぐ』ためには、一人でも多くの人に「**進んで挨拶**」すること。感謝の気持ちを持ち、「**ありがとうと伝える**」ことの大切さと同時に「**ありがとうと言われる人**」になることができるよう心がけることを話しました。また、周りの人に対して「**思いやり**」のある行動をしようとも伝えました。

『**学びをつなぐ**』ということは、学校での学習場面において「**人（教師や友達）の話をよく聞く**」、「**自分の思いや考えを伝える（発表する）**」ことや、「**学習の振り返り**」をし、自分の学びに目を向けることを続けていくこと、また、「**学習の復習ややり直し**」の徹底、「**宿題（家庭学習）の継続**」についても学びをつなげていくために欠かすことができない重要なことであると伝えました。

さらに、このように今の時期に、“心”と“学び”をつなげることは、『**願いをかなえることができる**』、『**自分のなりたい人になる**』ための大事な準備であり、同時に『**次の学年への準備**』となることを話しました。

結果はすぐに出るものではありませんが、継続できるよう励ましながら、春を迎える準備を整えていきます。

縄とび集会

先月の29日に「縄とび集会」を開催しました。冬の体力作りと学級の団結力を高める意味でこの時期に実施しています。「なぜ、こんな寒いときに」「なぜ、コロナやインフルエンザが流行るときに」と思われる方もいらっしゃると思います。ただ、私は「この時期だからこそ、実施するのです」と申し上げたいです。1学期から担任と子供たちで学級作りをしてきました。1学期当初は、慣れない担任の先生、学年の取組に戸惑った子もいたかもしれません。「前の先生がよかった」「新しい学年になって…」と愚痴の一つも出たことでしょう。そう思えるのは、昨年度にとってもよい学級作りをしたからです。そして、そんな愚痴もどこへやら…。運動会、校外学習などを体験するうちに、トラブルを乗り越え、新しい思い出が上書きされていきます。今頃は、多くの子供たちが「今の先生、今の学級でよかった」と思っているのではないのでしょうか。この「縄とび集会」は、自分たちで目標を立てて、その目標を達成することを目的に行います。そして、引っかかっても時間内にどれだけ跳べたかを数えます。「学級のまとまり」が表れる行事だと思います。他の学年に負けたといって悔しがる姿、引っかかって「ドンマイ」と声をかけてどんどん跳ぶ姿、普段は跳べなかった子が本番に跳べた姿に感動します。この時期でないと、この「学級のまとまり」はありません。今年も、たくさんのドラマがありました。



1年生

114回

2年生

218回

3年生

109回



4年生

230回

5年生

233回

6年生

362回

情報交換会



先月、大雪(1/24)にも関わらず、小ヶ倉小学校区の民生委員さん、主任児童委員さんとの情報交換会を行いました。この会は、学校の教育方針や子供たちの様子を伝えたり、日頃から地域で子供たちを見守っていただいている皆様からの御意見や御感想を聞かせていただいたりするのためのものです。

地域で見かける「子供たちのよさ」として、次のような点を教えていただきました。

- ① 全体の人数が少なくなって寂しいが、縦のつながりを感じる(下校パト時など、上級生が下級生にやさしく指導している。)
- ② 挨拶をきちんと返してくれる子供が多い(ただし、自分から進んでということは少ない。)
- ③ 公園の使い方がきちんとできる(トイレの使い方やごみの片付けをしっかりとっている。)
- ④ 帰宅時刻を守っている子供が多い。 など
(主な御意見)

温かく見守っていただく方がいるからこそ、校外においても子供たちが安心して生活できていることをあらためて感じました。

その他、以下のことも話題になりました。

- ① 自家用車での登校について、できるだけ徒歩での登校をさせ、しっかりと体力をつけさせる方が望ましい。
- ② 「子供は親の姿を見て育つ」大人が手本になる行動をする。
- ③ 「地域で育てる」という意味でも、何かあればその場で指導できる大人の大切さ。
- ④ あれこれ手を掛けることが、子供にとって本当に大切なのか、それが優しさなのかを吟味し、厳しさの中にある愛情をもって、子供の将来を考えた接し方が大切になる。 など

情報交換の後には、校内で子供たちの学びの姿を御覧いただきました。グループで学び合っている様子や、PCを使った個別学習に、時代の変化を感じられた様子はあったものの、落ち着いて学習する姿を褒めていただきました。

冒頭に書いたように、当日は寒波の影響による積雪の中、子供たちと一緒に徒歩で御来校いただきました。そのおかげで大変貴重な御意見をお聞きすることができました。誠にありがとうございました。今後とも御支援と御協力をよろしくお願いいたします。



「むごい」教育

校長のつぶやき



突然のこのタイトルで、一体何のことかと思われるでしょう。「むごい」とは「残酷、無慈悲、悲惨」という意味です。これが学校教育(子育て)とどのように関係があるのでしょうか。

さて、今川義元という有名な戦国大名がいます。義元は、二万人を超える大軍を擁していたにも関わらず、たった二千人の織田信長軍に桶狭間で討ち取られたことから、どちらかというとマイナスイメージが大きいかもしれません。しかし実際は、「街道一の弓取り」つまり「東海道一の武将」と言われ、今川家の最盛期を築いた人物です。

その義元には、教育界でも度々語られる次のような逸話が残っています。『徳川家康がまだ松平竹千代と呼ばれていた頃、当時の習わしに従って竹千代を人質に取った義元は、「竹千代にはむごい教育をせよ。」と家来に命じました。数日後、義元は家来を呼んで竹千代の様子を尋ねました。家来は得意気に、「早朝に起こし、駆け足で行動させ、粗食を与え、休憩もほとんどとらせず、昼は馬術や剣術、夜は学問と、非常に厳しくしております。」と答えました。それを聞いた義元は、「それはむごい教育ではない。」と語気を荒げて怒りました。「朝は好きなだけ寝させよ。山の幸や海の幸あふれる贅沢な食事を三食与えよ。武術や学問は無理強いするな。本人が望むものは何でも与えてやるが良い。そうすれば、大概の人間は駄目になる。』義元は、家康が将来自分に敵対できないように腑抜けにするつもりだったのかもしれませんが。

現代は物にあふれ、楽しい情報はスマホですぐに手に入るし、クリックすれば欲しい物が手に入る世の中です。不便なことから解放され、便利なのがどんどん増え、コンピューターや人工知能の進化によって自分で考えなくても答えが出る時代になりつつあります。義元流の「むごい教育」を行うための条件が見事に揃っている環境だと言えます。

子供に食事を与えない、暴力で子供の心を支配するなどのいわゆる児童虐待は、文字通り「むごい教育」です。しかし、辛さや苦しさを乗り越える厳しさを経験させず、甘やかしてばかりいても、結果的に「むごい教育」になってしまう可能性があるということを、義元の逸話は表しています。

ともすれば『大概の人間がだめになる』環境が目の前にある子供たちにとって、私たち大人の役割は、大変重要です。易きに流れることなく、個に応じた適度な辛さや我慢、苦しみなどの負荷を経験させ、それを自分の力で乗り越えさせることで、子供たち一人一人が、自ら成長できているという実感をもてるような教育環境を作ってあげなければならないと感じています。